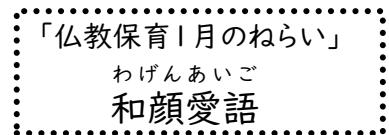




「心に元気を注ぐ」

令和8年 1月9日
(配信:12月26日)
佛教大学附属こども園



新年あけましておめでとうございます。

この1年が子どもたちの笑顔があふれる1年になることを心より願っています。

私たちは互いに微笑みあうとき、相手の目を見ます。人にとっての目には特別な意味合いがあります。他の動物にとっての目は、見るためだけの装置です。一方人間にとっては、見ることに加え、見られて心を読ませる装置でもあるようです。そして、目の動きに表情が加わると、「今あの人は何に対してどんな気持ちを持っているか」を読み取ることができます。

「近くに誰かがいて何かを見てニコッとしている」「難しい顔をしている」こうしたことを通して人は安全なものや好ましいもの、または危険なものなどを理解していきます。こういう力は大体生後9ヶ月前後からすでに身についていると言われています。たとえばお母さんが自分の方を向いてニッコリしていたら「そこにいてくれてうれしいよ」というお母さんの気持ちを読み取ることができます。

「そこにいてくれてうれしいよ」「愛おしいよ」と感じると子どもたちは、不安や嫌な気持ちを立て直したり、心や体いっぱいに「元気」という燃料を詰め込んだりすることができます。このことは思いっきり自分の好奇心に従っていろんなものを探して、チャレンジすることにつながります。

子どもたちは私たちの表情を見て、自分が受け入れられていること、私たちが他のことを考えていることや困っていることを読み取っていると思うと、毎日子どもたちに関わっている私たちの表情は大切です。それは、私たち大人が何も言葉にしないのに、心に思うことがあると、子どもたちは「どうしたん?」と声をかけてくれることからもわかります。そしてふっと目でモノを言っていた自分に気付き、反省することしきりです。

乳児の保育室では子どもと保育者の見つめ合う時間がたくさんあります。そこには一人ひとりの子どもの「僕の目線にこたえてくれるよね」という願い、そして「見つめてくれたね」と自分が受け入れてもらっていることを確かめているような時間が流れます。そして安心してまたやりたいことに向かう子どもたちです。

1月の佛教保育のねらいは「和顔愛語」(明るい笑顔を忘れずになかよくしよう)です。私たち大人は表情によって子どもたちの心に「元気」という燃料を注いでいることを忘れてはいけませんね。

副園長 村上真理子

